

論説

増税と外勢一部の關係



田川大吉郎

廣田内閣は、當初から増税を行ふ内閣と豫期されてゐた。馬場藏相の入閣は、其のための入閣と宣傳されてゐた。今回の増税は、豫期されたことが宣傳された通りに進捗せられたのである。世間が割合に、平靜にそれを迎へた所以である。

さりながら、平時三億圓の増税關稅の増收、專賣益金の増收、自然増收等を加へて別に二億圓、合計五億圓を一舉に増收するの計畫は、日本の増税史上、たしかに前例なき放膽の計畫である。

何がこれを、斯く爲さしめたか、一は日本の國力が進歩したのである。いかに、必要が迫らうとも國

力が堪へなければ、誰もかゝる計畫を立て得ない、それを立て得たのは全く我が國力の充實した賜物である。二十七八年の役當時のことを憶ひ、三十七八年の役當時のことを憶ひ、其の前其の後の増税のこと等を憶ひ起し、眞に隔世の感に撲たれ、只管感謝に堪へない次第である。

二は、外勢の變化である。若くばその逼迫である。若しその變化逼迫がなければ、國力はいかに充實しても、好んで増税を行ふ政府、政黨政治家はないことに定まつて居る。殊に軍備擴張が増税の大原因と稱せらるゝ事實に照して、それは最も明白である。

二

しからば、その外勢の逼迫せる事實は何か、

その一としては滿洲の事態である。滿洲の事起つて以來日本の財政は頓に膨脹した、吾等には數の知れない兵士が滿洲に出て居ると傳へられる。その初め荒木大將は、滿洲國が獨立し、日本軍が滿洲に進出すれば、日本は軍備を縮少することが出来る。地理的にロシアとの對抗状態が一變するからである。それが日本のため有利に展開するからだと説明し、従つて日本の財政は、昭和九年度ごろから次第に減縮して、事變以前に復し、或はそれよりも減少することが出来るであらうと附言してゐた。それは眞赤な嘘、今やますます、其の方面の逼迫した形勢に焦心させられつゝある、それが現状である。

その二として、本部支那に於ける成都のこと、漢口のこと、北海のこと等は、不意の出来事とするもさうでは無い、彼等の豫定した計畫であるとの聲が頗る高い——北支一帶の風雲急なる有様は最大の關心事と做されて居る。問題は自然に南支の海軍に對する北支の陸軍となり、現に陸軍は幾度かの増遣兵を加へて、北支一帶に、かなりの大軍を駐せしめて居る。

さりながら、それ故に、日本は軍擴を必要とし、此の度の増税をも敢てするに至つたのかと云へば、誰もさうとは思ふまい。支那は、近年軍備の擴張に専念して居るとは云へ、其の表面上の兵數は兎もあれ、實質上、それが怖るゝに足らない弱兵の群であることは、日本の熟知する所、精悍なる我が軍隊は些しもそれを氣にしてゐない、滿洲事變のころ、日本は支那を近世の國家でないと罵倒した。それには私は同感しかねた者であるけれども、今日の支那の軍隊を、日本の軍隊にくらべて成つてゐないと評することには異存は無い。私は、今日の日本の軍備擴張は、決して支那の脅威から來つたものではないと信じて居る。

三

しからば、それは何處から來つたか、日本が、外勢の逼迫に感じて、軍備の擴張を企て、増税を敢てするに至つた原因は、主として何國から來つたかといへば、十目の視る所、それはロシアからであらう。

ロシアは、最近に於て異常の發展を遂げた。今日の世界にロシアほど、外國の技師を多く雇ひ入れ、

外國の機械を多く買ひ入れ、致々として外國文明の吸收に努力し、武備の擴張に腐心して居る國は他に無いといふことである。その結果は模倣と追隨とに止まらず、創始された獨特のもの、他を遙に超乗するものさへあるといふことである。日本の軍人はこれを軍事の方面にのみ限つて見て居るらしい。が、それだけに止まらず、廣く他の方面にも及んで居るので、ロシアは近世のメツカとさへ稱せらるゝに至つた。先日、英國皇帝にピストルを擬した一兇漢——それは擬したのではないと辯解した——の如き、その遺族をロシアに移住せしめたいとまで歎願してゐたのである。その様のあこがれの情が所々に動かされて居る。

それに由り最大の刺激を受けつゝある者は現に獨逸であらう。その總統ヒトラーはたび／＼喋べらぬ、喋べる時は必ず多く語り、何事かを言ふ、ニューレンベクグの黨の大會に於て、彼はロシアを敵として戦ふべきことを揚言した。獨逸の百千の新聞紙は、筆を揃へて三日間のロシア攻撃をつゞけた。ヒトラーの動く時、新聞紙は必ずそれに呼應して動く習ひであるけれど、今回の如く、一氣に三日もつゞけて、しつこく戦ふたことは、これまで未だ會て見なかつた例であると云ふ、それだけヒトラーは、赤露の攻撃に熱中して居るのである。

彼は、そのために、埃太利の歸獨のことを一と先づ犠牲にして伊太利と和した。そして、埃太利と匈牙利とを手撫づけ、舊時の獨逸同盟を復活せんとして居る。そののみでない、彼は多年の怨敵佛國にさへ和親の手を伸べて、佛露の間を割き、佛國をして露國との同盟關係から手をひかせ、露國を孤立せ

しめんとして居る。獨逸銀行の總裁シャハトが巴里に使ひしたのは専ら其のためであつた。彼は其のために巴里に入り、巴里銀行の總裁を尋ね、勞働組合の首領に交り、勞働相、外相を訪ふたは勿論、首相ブルームには一時間近くの會談を遂げて、ブルームの如き濃厚和平の人に逢ふ者が、何うして満足しないことがあらうなど、齒の浮き相なお世辭を振蒔いて居る。そして、何れだけの緊要なる懇談を交へたか、佛國の外務省は、その要領の一部だも、ロシヤに通報せず、ロシヤ政府をして若干の不安と疑懼とを感じしめた。

それは其の筈、此より先き獨逸は、西班牙の内亂にも手を伸ばし、その叛亂軍に若干の援助を與へてゐたのである。佛國はそれに反し、その内亂の擴大を憂ひて、各國と不干渉の協約を作らんとしたのである。獨逸は例に依つて苦情を捏ね、煮え切らないと云ふよりも、寧ろ反對の氣鋒を示してゐた。しかるに、ロシヤに對する進撃の態度を決するや、彼は手のひらを返す如く、それを一變し、佛國に對しその不干渉提議に、體よく快諾するの旨を答へて、列國をして其の豹變の狀に一驚せしめたのである。彼はそれ位ゐるロシヤを怖れて居る。それ位ゐるロシヤを憎んで居る、ロシヤを包圍攻撃する、神聖同盟を作らんため逆上せ切つて居る。

彼はそのために一年兵役を二年兵役に伸ばした。それ故彼の兵數は今年から直に九十萬か百萬に達し、數年内には、歐洲第一の陸軍國になると謂はれて居る。

四

そこに生じつゝあるのが日獨同盟の説である。此の説の由來は古い、三年來や五年來のことでない。歐洲大戰の當時にもあつた、その以前、日露戦争の後にもあつた。

それに遡る必要はないが、共產主義に對する日本の恐怖と憎惡は、獨逸以下であるまいかと思はれる。そして滿洲國はその切迫の憂ひを痛感し、敵愾の情を激しきつて居る。此の時こそ日本は獨逸と組んで、對露神聖同盟の仲間に伍し、東西相應じて挾撃し、一舉に彼を殲滅せしめて、以て百年の安を圖るべきであるとの説を爲す者があらう。私は其の聲を所在に聞きつゝあるとも謂ひ得る。

しかしながら、果してさう爲すべきことであらうか、私は諸君と共に冷頭一番これを靜察したい。實にその靜察の必要のあらうことを確信するのである。

第一には、ロシアはそんなに強い國だらうかといふことである。獨逸は歐洲の強國である、日本は東洋の強國である、世界に名高い東西の兩強國が、相提携して向はねばならない程、ロシアは強國であらうか、弱い者に強い者が重なり合つて押しかゝることは、恥かしいことである。本當に強い者はそんな見つともないことをしない。日本と獨逸は、東西相應じて挾撃するの、前ロシアは何れだけの強い武力の國であるかを先づ靜察すべきである。

第二にロシアはそれ程に強い國ではないとする。しかしながら、日本も獨逸も、相當關心を有たね

ばならない關係の國だとする。この場合それを東洋に惹き着けて、日本の負擔で戦ふこととするか、獨逸の負擔で歐洲に戦はすることとするか、それは兩國の政治家、外交家の分内のこと、その才略に於て、努力に於て、何ちらとも決定し得らるゝこととすれば、私は敢て申したい。獨逸がいら／＼、逸り切つて居るのを幸ひ、それは、歐洲に押しつけ、獨逸に押しつけ、獨逸と歐洲との費用に於て戦はせることとし、日本はその負擔苦痛から免るゝことにすべきであらう。さうすることが今日の廣田内閣の任、日本の政治家、外交家の任、いづれが腦漿を絞つてかゝるべき筈の使命、機分であらうかと、

然り、私は斯く思ふ者である。對露の戰爭を獨逸の好みに任せて獨逸に押しつけ、ヒットラーをして思ふ存分、對露同盟の外交陣を張らせ、軍備擴張の運動に專念せしめ、日本は靜觀して動かす、慎重の考慮、その「神聖同盟」の渦中に捲き込まるゝを避け、西洋は西洋である。東洋は東洋である、東洋の強國たる日本は盛衰測られざる西洋の風雲の外に立ちて、徐ろに餘力を養ひ、争はず、戦はざるの間に、百年の後圖を立てたいものであると、

日本は今、種々のことを種々の角度から考へねばならぬ。この問題は其の中の最も大切ある一である。日本はそれを熟慮すべき緊要の時機に直面して居るものと私は考へる。

五

若し能くかくの如く、ロシアとの戦ひを獨逸に押しつけ、日本は其の外に立ち、ロシアとの死活の戦

ひから避け得ることになれば、ロシアを目當てとして、しきりに計畫されつゝある今日の軍備の充實と、それに伴ふ増税の負擔とは、幾分なりそれを免るゝことができ、我が國民は、ホツと一と息仕合せであらうと思ふ。

勿論、私はそれ故に今日の軍備を全廢してもいゝとは申さない、馬を華山の陽に野し、牛を桃林の野に放ち、復たとそれらを軍事に用ゐないことを示したのは、支那の所謂王道の政治であつた昔の支那は、實にかくの如き平和を王道の理想としたのである。今日の滿洲國はこれを理想として居るか否やを知らぬ。しかしながら、王道政治を滿洲に建設せたいと主張する若い軍人達は、それを知つてゐなければならぬのであるが、但、私は絶えず平和の理想を唱へるけれど、未だ曾て斯の如き軍備の撤廢論を唱へたことはない。撤廢論を唱へないのみか、その半減論をも唱へたことはない。此の際、獨逸とロシアとの對抗により、いゝ幸ひである。日本はロシアとの抗争状態から、數歩を退ぞくべしと申す中央にも、それ故に日本は軍備を大縮少して可なりとは申さない。たゞロシアを目當として奮進しつゝある日本今日の軍備充實は、それに由つて若干緩和し得らる。筈、その程度は今日の大増税を、大體に於て必要としない程度の緩裕さを覺えるであらうと申すのである。

私は此の際の日本の苦境を、今日の増税に堪へ得ない程の苦境に在るものとは思はない。けれど、も若し増税をしないで濟むものなら、しないで濟ませたいものと思ふ。多年奮闘を續けさせられた日本國民である。些しは休養し蘇息させらるべきである。それ故に私は上來の如く政治家外交家

達のひと奮發を願ふ。實に、それは政治家、外交家達の手腕の現しどころ、一人でも二人でも、日本に政治家らしい政治家があらば、外交家らしい外交家があらば、それは必ずこの機會を逸せず、この方途に進出すべきものであらうと思ふ。惜て日本には、それらしい政治家、外交家は、一人もゐないものか憂ひて焦らざるを得ない。誠に、残念の至りである。

六

尙一事を書き添へて本論を終りたい。

それは、ロシアの軍事方面に着目するの外、他の方面にも着目すべきことである。

今日の日本は皆の言ふ通り、軍人の得意、旺盛、自慢の時である。ロシアの事に關しても、軍人の觀察、軍人の報道のみが傳へられ、他の方面の觀察、報道は殆んど傳へられてゐない。そして、軍人は専ら軍事の方面のみを觀察する故、その報道は軍事に偏して居る嫌がある。今日のロシアは、上下を擧げて、たゞ、軍事にのみ、のぼせ切つて居るが如く傳へられる。しかしながら、然でない、今日のロシアは、軍事に進みつゝある如く、他の方面にも、駢び進みつゝある。

例へば、道路を視よ、ロシアの道路は、各方面に亘つて、非常の發達、それは、滿洲國の道路が、日本の進出以後、非常の發達を遂げたと同様である。或は同様以上である。最近のロシアを視た者は、いづれも、其の道路も、發達、交通機關の發達に、目を見張つて居る。

現にモスコゝに於ける地下電車の壯麗なる設備は伯林にも、巴里にも、倫敦にも、紐育にも、其の比を見ない。それは何としても世界一の壯麗さと謂ふことである。地下道の濶いこと、天井の高いこと、電車の寬くして綺麗なこと、電燈の惜みなく設備されて晝間の如く明るいこと、そして停留場は總體大理石作り、輝かしいこと、晴々しいこと、大小の店舗の整然たること、何から何まで整備せられて、一點の漏れのないこと、世界の大都のを見渡して、やつぱり、モスコゝのが第一だつたと曰ふ、それ程に能く建設して居る。世界の大ききを惹き着けんがためである。

そこに高壯な摩天樓が建築されつゝある。下層の工事は既に出來て、だん／＼築き上げつゝある。出來上れば百二十階、紐育第一の高樓百二階を凌ぐこと十八階正に世界第一の高樓である。彼は斯様な建築に於ても世界一を期して奮進しつゝあるのである。それはたゞ百二十階の一高樓に止まらない、相駢んで民衆の住宅も修繕し、改築し、新造し、擴張し、凡そ建築事業の盛んなる。今日のロシアは他の富裕國家に比して劣らないだらうと謂はれる。それがあらぬか、その勞働者は、毎日曜は賃金付の休みで、平日は危険な勞働は六時間、其の他は七時間、英國の勞働者は英國の標準にくらべて、ロシアのそれを見下すけれど、ロシアの勞働者に曰はすれば、ロシアの勞働者の現狀は決して英國のそれらに劣るものでない、ロシアの方が反つて良好だらうとさへ申して居る。

建築界、勞働界が斯くあるのみでなく、その美術館や、博物館の多くして中に蒐集せる古今東西の材料の豊富なること、是れ亦世界の周遊者の齊しく驚歎して居る所である。その筈である、今日のロシア

アに於ては美術品の私藏を許されない。國はそれを徵發するのでないけれど、借り上げて保管する。それで其の材料は駢べ切れない程多くして、絶えず取り換へて展覽せしめられて居る。

一般を擧ぐるも斯の如し、その代表者が、聯盟總會に臨んで、正義のため、平和のため、軍備縮少のため一番有力と思はるゝ意見を聽き、小國側の、正義論者、協調論者が、それに靡然として喝采して賛同し、包圍しつゝある事實の如き、一々記述しなくとも、以て其の概要を窺ふに足るであらう。

彼れ今日のロシアは、獨り軍事にのみ熱狂して居るのでない。軍事に熱狂すると共に、他の産業にも、貿易にも、教育にも、衛生にも、立法にも、すべての方面に、いづれ残らず精力を注いで居るのである。軍事の方面に、我が軍事視察者の目を惹き着くるに足るものがある如く、他の方面にも、若し軍事視察者と同等の視察力のある視察者あらば、又同等の注意を惹くべき著大の進歩の事績がいろ／＼あるのである。彼を單なる軍事狂燥國と視るは當らない。こゝに、吾等の考慮すべき餘地が相當示されて居るのである。

獨逸をして彼に當らしむるの外、吾等は斯の方面の彼にも、相當の注意を拂はねばならない。

その結果、若し吾等の大増税を増税せざるもいゝ事に爲し得れば幸ひである。若くば増税の結果を軍事よりも、他の産業、教育、道路、港灣、河川等の方面に注ぐことが出来る様になれば幸である。ヒットラーの呼號に感ずる所あつて、此の増税と外勢一部の關係論を作る。

(九月二十六日)